

聖歌からオルガヌムへ

——ノートルダム楽派 2 声オルガヌムの中景構造としての「聖歌枠組モデル」——

平井真希子

ノートルダム楽派の 2 声オルガヌムは、持続音のテノルの上に展開する長大なメリスマを特徴とするが、その音高構造については十分研究されていない。この部分のリズムは記譜法上問題が多いのに対し、音高はほぼ完全に決定できるため、かえって研究者の興味を引かなかつたのかもしれない。本論文では、前景、中景、後景という 3 つの層に分けて音高分析をおこなう。なお、分析にあたり一部シェンカー分析の用語を借用するが、これは層構造の概念が有用だと思われるためであり、この音楽にいわゆるシェンカー分析が適用できることを意味するものではない。

後景ともいふべき最も深い層となっているのが、テノルに置かれた引き伸ばされた単旋聖歌の旋律であることは容易に理解できるであろう。一方、音階上の下行やゼクエンツなどの定型的装飾技法は『ヴァチカン・オルガヌム論文』その他の理論書で言及されるなどある程度意識的に使われており、前景と考えられる。

この両者をつなぐ中景構造はどのように考えられるだろうか。本論文では、テノル音を終止音と考えた場合の単旋聖歌のアンビトゥスに相当する 4 度、5 度の枠組が多くの場合メリスマ形成の基礎となっていることを指摘し、「聖歌枠組モデル」と名付ける。この枠組は同時代のオルガヌム理論書には表れず意識的なものとは考えにくい。むしろ、それまで聖歌を歌い続けてきた経験や、テノル声部と組み合わされた時の音の響きの影響などから、無意識に使われるようになっていったものではないかと思われる。このように、聖歌、聖歌枠組モデル、定型的装飾技法という 3 つの層を経て、聖歌からオルガヌムがまさに「アウスコンポニーレン」されていくという仮説により、オルガヌムの作曲過程の説明を試みる。